そんな恋のふいんきで(全)

ひなた　そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そんな恋のふいんきで（全）

【Ｎコード】
Ｎ５４９０Ｗ

【作者名】
ひなた　そら

【あらすじ】
なんでも言いなりになってくれる幼なじみのシュンちゃんが大好きなアカリ。
でもそれは恋心とはちょっと違う？
ゆるゆるシュンちゃんと、中身がちょっとアレなアカリのゆる～い恋のおはなし。
※「雰囲気（ふんいき）」ではありません。「ふいんき」です。

０１：春休み（前書き）

お題サイト「確かに恋だった」さまからお借りしたお題です。

01：春休み

「ねーシュンちゃん」

幼なじみのアカリがいつものように僕の部屋でくつろいでいる。ベッドの上で寝ころがったまま、私物のマンガを読んでいたらしい。らしい、というのは、僕は勉強中で彼女の行動を把握していないせいだ。

アカリの声は聞こえていたけれど、今は数式を解くほうが大事。心の中だけで返事はしてあげる。

「シュンちゃんってばぁ！」

「うん、今勉強中だから静かにしてね」

「お勉強ばっかりしてたら、頭腐っちゃうんだよ？」

それはないね。

それと、アカリは少し勉強したほうがいいと思うんだ。

無言のままノートにシャープペンシルを走らせていると、それが引き抜かれた。

「あのねぇ、アカリ……」

「シュンちゃん。おはなしがあります」

「はい、なんでしょうか」

イスを回転させて、仕方なくアカリに向き合うと、彼女は満足したように微笑む。

アカリは僕のひとつ下で、春休み明けには高校2年生になる。お向かいにお住まいの、大変勉強のできない女の子。でも、運だけはいい。

『シュンちゃんと同じ高校に行く！』と言い出したときは驚きよりも呆れが先だったけれど、なんと受験当日に発熱し、試験を見事クリアした。カンが当たるという奇跡を起こして。
入試はクリアしたけれど、学校生活にそんな奇跡が何度も起こるはずがなく、アカリの成績は毎回底辺。でも本人はあまり気にしていないようだ。

「シュンちゃん。一生のお願いがあります」
「それはもう何度も聞いています。却下です」
「アカリの一生のお願いです。聞いてください」
「……なんでしょうか」
「シュンちゃん、もう一度2年生をやり直してください」
「アカリさんは幼稚園からやり直してください」

よしよしとアカリの頭を撫でて、再びイスを回転させて机に向かう。
彼女の一生のお願いは、いつもこんな感じだ。
今すぐ去年の季節限定アイスが食べたい、とか、数か月先に発刊される単行本が今すぐ読みたい、とか、無理なことばかり。
もし“一生のお願い”を叶えてもらえるなら、僕なら別のことをお願いするんだけどな。
だって、文字どおり、生きているうちに一度しか叶えてもらえないんだから。
ちらりと彼女の様子を窺うと、よよとベッドに突っ伏して泣いていた。
本当に厄介な幼なじみなんだ。
この嘘泣きに何度も振り回され、言いなりになる僕。
勉強ができても、世渡りはヘタらしい。

「アカリ、おいで？　ダブるのは嫌だけど話は聞くよ？」

「あたし、シュンちゃんと同じクラスになってみたい！」
「うん、無理だね？」
「だって……シュンちゃんの彼女が自慢するんだもん」

彼女？
誰それ？？
今までに何人か付き合ったことはあるけれど、アカリの受験勉強を見るようになったころから一度も彼女なんていない。
いったい、どちらの彼女さんなのだろう。

「僕の彼女って、誰？」
「大下さん。って、シュンちゃん、ほかにも彼女がいるのっ！？
最低っっ！！」
「落ち着いて、アカリ。物を投げちゃいけません」
「シュンちゃんがぐれたー！　おばさぁぁん！」
「待ちなさい。ぐれてない。彼女もいない。落ち着こうか」

暴れるアカリを押さえつけて宥める。
アカリはときどき、こんなふうに勝手に妄想しては大パニックを起こす。本当に厄介な幼なじみなのだけど……憎めないのはきっと、生まれてからずっと兄妹みたいに一緒にいたから。
それ以外、考えられません。

「シュンちゃん、同じクラスになってみたいよぅ」
「だから無理だってば。じゃあ、僕が大学受験に失敗して、アカリがストレートで入れば同じ学年になれるね。勉強しようか？」
「えー……。勉強はイヤ」

僕が受験に失敗するのは問題ないんだね、アカリさん……。
ぎゅうっと抱きついてきた彼女は、今絶対に僕の服で鼻水を拭いた。

「アカリさん、お願いだからティッシュで拭こうか……」

なんのこと？　と顔を上げた彼女は、本当に楽しそうに笑う。

いや、いいんだよ。泣かれるよりは、笑っていてくれたほうが僕もラクだから。

中身はちょっとアレだけど、見た目はかわいいんだよ。特別美人ではないけれど。

僕のクラスメートの中にも、ときどきアカリと付き合いたいなんて言い出す奇特な男もいるくらいだし。

そんな話を聞くたびに、僕は心の中で思うんだ。

『中身がちょっとアレだけど、それでも付き合いたい？』って。

もしそれでもいいって言われたら、僕はきっと熨斗をつけて進呈するね。

ただし、嘘泣きが得意なアカリを本当に泣かせたり、人を困らせることが生きがいのアカリを困らせたりしない男限定だけど。

「じゃあねぇ、シュンちゃん。せっかくの春休みだし、これから遊びに行こうか！」

「ごめんね。勉強したいからひとりで遊びに行ってね」

「やだー！　一生のお願い！！！」

本日2回目の“一生のお願い”が飛び出す。

やれやれと思っている隙に、アカリは僕のクローゼットを開けてポンポンと衣類を取り出しベッドに放った。

「急いで着替えてね！　カラオケ行こうね！」

僕に返事なんか求めていないアカリは、クローゼットの扉のすき間から顔を出してにっこり微笑んだ。

そしてウォークインではない普通のクローゼットの中に消えたアカリは、まるでかくれんぼでもしているかのように大きな声で数を数えだした。
中身は幼稚園児並みの、僕の幼なじみ。
「もういいかーい」の声に、まだですと答えて、仕方なく着替えをする。
今日は6時間ぶっ通しのカラオケにならないことを、切に願う僕。

「もういいかーい」
「……もういいよー……」
「んじゃ、シュンちゃん、まいりましょうか！」
「お手柔らかにお願いします……」

きゅっと握られた手のひらが引っぱられて、僕は地獄のカラオケへと繰り出した。
ご機嫌なアカリは、それはもう本当に楽しそうに町の中を歩く。
途中ですれ違うご近所さんは、僕たちが生まれたころからの付き合いのせいか、もう高校生だというのに「相変わらず仲良しねぇ」と声をかけていく。
手を繋いで歩くのが半分癖になっているのもあって、誰ひとりとしてその仲を誤解することはない。
だけど厄介なのは、それこそ僕に彼女ができたとき。
歴代の彼女たちとは、まずアカリの存在で必ずケンカとなり、泣かれる。
一応、特定の彼女がいるときはアカリを遠ざける努力はしてみるんだけど、そんなことが通用するアカリではない。
あの手この手を使って僕のそばにいる。
アカリにも彼氏ができれば、僕から離れてくれるのだろうけど、アカリは男嫌い。
うまく言いなりになってくれる幼なじみがいたせいで、一般的な男

ではダメなのだそうだ。
半ば諦めに入った僕は、カラオケに到着するといつものように財布から会員証を取り出し、用紙に記入をする。
春休みだから混んでいるだろうと思っていたのは僕だけで、待ち時間があることを知ると、アカリは一気に機嫌を悪くした。

「シュンちゃん、早く歌いたい」
「おとなしく待ちましょう。たった30分だよ？」
「30分も待つのに平気なのはシュンちゃんくらいだよ」

まるで変人を見るような目でアカリは僕を見上げる。
もう慣れたから平気だよ、僕。
バッグの中から本を取り出し、すっかり待機の態勢に入ったところで誰かに声をかけられて顔を上げた。

「シュン、デート？」
「あー……子守り？」

声をかけてきたのは同じクラスの樫田尚弘。
興味深そうにアカリの顔を覗き込んだ瞬間、アカリは僕の身体のうしろに隠れた。
少しだけ振り返って様子を見ると、これ以上ないってくらい嫌そうな顔をしている。
樫田は自由気ままな性格をしているけれど、害のあるやつじゃない。
面倒見もいいし、いいやつなんだけど、アカリにはお気に召さないらしい。

「ほら、アカリ。あいさつは？」
「……じゃあこんにちはー」
「はい、こんにちはー。俺ら、さっき入ったばっかりだけど、くる

？　結構待たされるんじゃね？」
「３０分くらいだって言ってた。アカリ、どうする？」
「イヤ」
「「……」」

即答のアカリに唖然とする樫田と僕。
妙な空気が僕たちを包み、耐えきれなくなった樫田は苦笑いを浮かべて去っていった。
申し訳ない、樫田……。僕のしつけがなっていないばっかりに……。

「アカリさん」
「シュンちゃんのお友だち、嫌いだもん……」
「そういうことを言わないの。樫田はいいやつだよ？」
「いい人でも悪い人でも嫌いなの！」
「困った子だね……」
「あたしからシュンちゃんを取る人はみんな嫌いだもんっ！」

迷惑すぎるヤキモチにため息がこぼれた。
まあ、悪い子じゃないんだよ、アカリって。
ちょっと中身がアレなだけで、さ。

わがままな幼なじみは、結局僕の春休みのすべてを独り占めしてくれた。
両親に大学の合格祝いは、ひとり暮らしをお願いしようかな。
そんなことを思った、僕の春休み。

Ｓｐｅｃｉａｌ　ｔｈａｎｋｓ！：お題サイトさま「確かに恋だった」

０１：春休み（後書き）

おはなしと同じくらい、のんびり更新していきます。
どうぞよろしくおねがいします。

02：子ども時代

僕とアカリは幼なじみ。
ひとつ年下のアカリは、両親が共働きのため、幼いころから僕の家にいることが多かった。
もう、ひとりで留守番くらいできそうな年齢だと思うのだけど、アカリは高校2年生になった今でも、毎日僕の家にいる。正確には、僕の部屋、なんだけどね。

「ねーシュンちゃん」
「んー？」
「その本、おもしろい？」
「これ？　おもしろいよ。アカリも読んでみる？」
「シュンちゃん、このマンガ、おもしろいよ」

……このように、聞かれたことに返事をしても、僕が聞いたことに返事をしてくれることはあまりない。
よかったね、と適当に笑みを返して、僕は手元の本に視線を落とした。
読書は好きだ。
活字の中に見えてくるたくさんの背景を、より想像を膨らませていくと、本の中に吸い込まれたような感覚になる。
ベッドを背にいつもと同じように自分の世界に入って読み進めていると、肩にコトンと重さが加わる。視線を移すまでもなく、アカリが退屈になって寄りかかっているのがわかった。

「アカリ、重い」
「女の子に言っちゃいけないセリフなんだよっ！　シュンちゃん、お勉強はできるけど、デリカシーはないっ！」

「はいはい、ごめんね？」

ペラリとページをめくり、活字を目で追っていく。
寄りかかっていたアカリが今度はベッドの上に移動して、僕の背中にのしかかってきた。
この子は本当に……。いったい毎日なにをしにやってくるのだろう。
退屈ならこなきゃいいのに。たまには友だちと遊びに行けばいいのに。

「ねーシュンちゃん。アルバム見ようよ」
「アカリは本当にいつも唐突だね」
「シュンちゃんはあたしが生まれたときのこと、覚えてる？」
「アカリが生まれたとき、僕は1歳だからね。覚えてないかな」

正直に答えた瞬間、後頭部に痛みが走った。

「……アカリさん……頭突きはやめてくれませんか……」
「シュンちゃんの馬鹿っ！！　あたしはおなかの中にいるときからシュンちゃんのこと覚えているのに！」

うわぁんと嘘泣きが始まる。
たしかに胎内の記憶があるという人もいるかもしれない。だけど僕はもちろん覚えていない。そもそもアカリは妹じゃなくてお向かいさん。幼稚園時代にアカリと遊んだ記憶は若干あれど、そんな生まれたときのことなんて……。
一生懸命子ども時代のことを思い出そうと努力はしてみるものの、やっぱり思い出せない。
僕はしぶしぶ立ち上がって、クローゼットに収納されているアルバムを引っ張り出した。
まんまとアカリの罠にかかったわけだ。

「シュンちゃんの赤ちゃん時代って、今と変わらないねー？」

ベッドの上にいるアカリが、僕の肩に顎をのせて満足げにアルバムを覗き込む。

写真の僕は、推定0歳。まだ立ち上がってもいないころの写真だ。

そのころから変わっていないとしたら、ちょっとした問題じゃないだろうか。

自分のアルバムなんて見ても楽しくない僕は、自分の記憶を探りながらどんどんページをめくっていく。

1冊目が終わって2冊目に入ったところで、ようやくアカリの赤ちゃん時代の写真が混ざってきた。

だけど、まだこのあたりの記憶はない。

でも、写真の中の僕は、アカリを大切そうに抱きしめて笑っていた。

「全然覚えてないや……」

「あたしは覚えているよ。シュンちゃんはお庭でプール遊びしているのに、あたしは赤ちゃんだからベランダに寝せられているの。一緒に遊びたいよーって泣いても、入れてもらえないの」

嘘くさいのに、嘘だと指摘できない僕は、肩にのっているアカリの頭を撫でた。

黙って撫でられていたアカリの手がアルバムに伸びてきて、ページの先へ進む。

「このときの花火はね、シュンちゃんがあたしの近くでやってくれたからすごくうれしかったの」

「この日はね、シュンちゃんとおばさんと3人でお祭りに行ったんだよ。シュンちゃんはね、ナイショだよってわたあめをわけてくれ

たの」

「このときはね、せっかく海にきたのに、ビニールプールから出してもらえなかったんだよ。シュンちゃんがお魚捕まえてきてくれてね、プールに入れてくれたの」

僕の覚えていない、僕の過去。

アカリは本当に覚えているみたいに次々と解説していく。

「シュンちゃんが幼稚園に入園して、あたしと遊んでくれる時間が少なくなったの。だからおばさんにお願いしてお迎えについて行ったんだよ。シュンちゃんはあたしを見つけたらすぐに走ってきてくれた」

「……そうなの？」

「うん。全部、おばさんから聞いた話」

信じた？　といたずらっぽく笑ったアカリは、なぜかカプリと僕の肩をかじった。

「食べちゃいけません」

「でもね、おなかの中でシュンちゃんの声を聞いたのはホントだよ？」

「ふぅん？」

「ずぅっと一緒だよって、撫でてくれたよ」

アカリはちゅっと僕の頬にキスをして、ベッドから飛び降りた。

「シュンちゃんかじったらおなかがすいたので、おやつもらってきます！」

にこりと微笑んで敬礼したアカリは部屋から出ていった。
でも僕は動けなかった。
少しだけ思い出したんだ。
アカリのお母さんの大きなおなかを撫でさせてもらったこと。
シュンちゃんの妹にしてあげてね、と微笑まれたこと。
『ずっといっしょだよ』と言ったこと。
この話を、アカリのお母さんがアカリに話していれば、知っていてもおかしくない。
でも、どうしてか僕は、本当にアカリがおなかの中で聞いていたんじゃないかって思った。

「シュンちゃんー！　一緒にケーキ買いに行こうよー！」

1階からアカリの澄んだ声が聞こえてきた。
パタンとアルバムを閉じて、ベッドに放る。
アカリは僕の妹みたいなものだから。一緒にいるのはもう生活の一部になってしまったから。
立ち上がって、机の引き出しの鍵をあける。
そこにひとつだけ入っているもの。
それは、昔の僕が鍵をかけて閉じ込めたもの。
僕が唯一、アカリに内緒にしているもの。

「シュンちゃんってばー！」
「今いくー」

大きめの声で返事をして、僕はもう一度そこに鍵をかけた。
これを処分するのは、アカリに彼氏ができたときかな。
そんなことを思いながら、アカリが待つ玄関へと向かった。

いつものようにしっかりと手が繋がれ、ご機嫌なアカリに引っ張

られるように町の中を歩く。
母さんがひいきにしているケーキ屋にたどり着くと、アカリは嬉しそうにケースの中を覗き込んだ。
どんなに選んでも、結局いつもチョコクリームのケーキしか買わないアカリ。
それなのに、なぜか毎回楽しそうに眺めている。

「アカリ、チョコのケーキでいいの？」
「うん！　シュンちゃんはいちごタルト？」
「僕はいらないかな」
「いちごタルトね！」
「うん……」

別に僕はケーキが好きなわけじゃない。でも、食べられないわけでもない。だから買うのは別にいいんだけど、せめて選ばせてもらいたいよね。
アカリは母さんと父さん用にショートケーキを選び、いつものチョコレートケーキといちごタルトを注文した。
帰り道、ケーキの箱を大事そうに抱えているアカリを見下ろして尋ねてみる。

「アカリはどうしていつもチョコのケーキなの？」
「おいしいからだよ？　シュンちゃんはどうしていつもいらないって言うの？」
「買っても自分の口に入らないからね」
「あたしが奪って食べちゃうみたいな言い方しないで！」
「だって、事実だよね」

にこりと微笑むと、アカリは不満そうに頬を膨らませた。
いつだってアカリは僕の分のケーキを横取りする。それは子どもの

ころから変わらない。
横取りされて泣いたこともあったほどだ。
今思うと、子ども時代からアカリに振り回されている僕の人生。

「シュンちゃん、あたしのこと好きですか？」
「好きですよ。嘘泣きが得意で甘えっ子で人のケーキを奪ってまで食べてしまうアカリさんですが」
「あたしも、嫌味ばっかり言うけど学習能力の低いシュンちゃんが好きですよ」

にこりと微笑んだアカリは、そっとケーキの箱を持ち上げた。
その表情は、子ども時代と一緒。
『シュンちゃんのケーキ、味見させてね！』と言いながら、全部食べてしまうときと同じ顔。
それでも僕は、アカリを愛しいと思うんだ。
幼なじみで、ひとつ年下のアカリのことが。

Ｓｐｅｃｉａｌ　ｔｈａｎｋｓ！：お題サイトさま「確かに恋だった」

03：猛暑

「あついー……」

だらりと僕と背中にはりつく、幼なじみのアカリ。
くっつけばくっつくほど暑いということが、彼女にはわからないのだろうか……。
今日も僕の家にやってきたアカリは、母さんからもらったらしいアイスをかじりながら暑いという言葉を連呼する。

「シュンちゃん……暑いです……」
「じゃあ離れてください。僕も暑いです」
「嫌です。シュンちゃん、暑いよぅ……」

夏が暑いのはもうしかたがないと思うんだ。
そして、極力その暑さを思い出さないようにしたほうがいいと思うんだ。
ベタリとくっついた背中が本当に暑い。
なんのためにくっついているのか、せめて理由を教えてくれないだろうか。

「アカリ、離れたら涼しいと思うよ？」
「知ってるよ、それくらい。でもあたしはシュンちゃんにくっついていたいの」
「なんで……。僕、これから出かけるんだけど」
「あたしも行く」
「樫田とかいるよ？　大下もくるけど」

手に持っていたアイスの棒からぽとりと青いかたまりが落ちた。

僕はアカリを背負ったままティッシュでそれを拾う。
樫田と大下は僕のクラスメートだ。図書館で涼もうと誘われて、たまにはいいだろうと出かける用意をしているときに、アカリが部屋にやってきたのだった。

「シュンちゃん、あたしを置いていくの？」

悲しそうな声が耳元で聞こえる。
一応、僕にも友だち付き合いというものがあってもいいと思うんだよね。
いつもアカリに付き合って部屋にこもっているだけで、別に僕は勉強が趣味なわけでもないし、遊びにだって行く。
ぎゅっと首に抱きついたアカリは、たぶん今、とてもショックを受けている。
だけどここで折れてしまったら、アカリこそ友だち付き合いのできない子になってしまうのではないだろうか。

「アカリもたまには僕以外の人と遊んでおいで？　同級生と遊んだほうがきっと楽しいよ？」
「シュンちゃん……」
「ん？」
「アイス、もらってきて」

相変わらずかみ合わない会話。
ため息をつきたいのは僕のはずなのに、耳元で大きなため息をついたアカリは、するりと手を放して背中からおりた。

「ひとつだけ忠告しておこう、シュンちゃん」
「なんですか」
「樫田には気をつけて。やつはシュンちゃんを狙っている！！」

おかしな発言をしたアカリは、僕の背中を思いっきり叩くと、部屋を出ていった。
樫田は、男だ。
そして、僕も男。
アカリさんはこの暑さで本格的に脳が溶けたんじゃないだろうか……。
……という話をすると、図書館だというのに樫田は盛大に笑った。
「懐かれてるねぇ、シュンちゃん」
「最近はアカリの発言の意味がわからなくて困る」
「わざとだったりして。シュンの気をひきたくて」

そう言ってくすくすと笑う大下に苦笑いを返しながら、それはないとこっそり否定する。
アカリにそんな高度な小細工ができるとは到底思えない。それに、彼女の僕に対する執着は、異性に対してというより家族に近いものがある。
なにより、僕はアカリが大事だ。アカリだって、いくら頭がアレでもそれくらいわかっているはず。
小細工なんて不必要な関係だと思うんだ。
だけどそんなこと、きっと誰に話しても理解しない。もっとも、理解してもらおうとすら僕自身が思わないからどっちでもいいんだけどね。

「アカリちゃん、かわいいよな。なんで男嫌いなんだろう。もったいない……」
「言いなりになってくれる幼なじみが甘やかしたせいだろうね？」
「シュンはどうなん？」

にやりと笑った樫田は僕の顔を覗き込んだ。
隣からは妙な緊張感が伝わってきて居心地が悪い。
それを狙ったであろう樫田を見上げて僕はとぼける。

「僕？　どうって、なにが？」
「アカリちゃん。付き合ってみようとか思わないのかよ」
「うーん……」

苦笑いでごまかして、本に視線を落とす。
アカリは僕の幼なじみ。妹みたいな存在で、たぶんアカリにとっても僕は兄。
この関係に不満はない。
その返事が気に入らなかったのか、大下は頬を膨らませて僕の手元から本を取り上げた。

「シュンに子守りなんか似合わないよ！」
「そう？　僕、けっこう子ども好きだよ？」
「そういう意味じゃなくて！　あの子、絶対計算してるってば！」
「アカリは計算が1番苦手だよ。だいたい間違ってるからね」

大下が言っていることの意味くらい、僕にもわかっている。
今まで付き合ってきた“彼女”にもだいたい同じことを言われるから。
でもね、アカリがどんなに裏でしたたかな考えを持っていたとしても、僕はそんなことで幻滅したり嫌いになったりしない。
彼女を悪く言う人はたくさんいるけれど、僕にとっては大事な子。

「今日はアイスの特売日だった。僕、帰るね」
「シュン！」

大下の手をやんわりと振りほどいて、僕は笑う。
彼女が僕のことを好きだと思ってくれる気持ちはうれしいけれど、きっと僕は大下のことを好きになれない。
バッグを持って図書館を出ると、一気に体温が上がった。
すっかり忘れていたけれど、これが自然の気温なんだ。
作られた快適な世界から抜け出して、少しだけホッとして何げなく視線を送ったその先に頬が緩んだ。
きっと僕は、アカリのために生まれてきたんじゃないかと思うんだ。

「アカリさん、いつからそこに？」
「……人違いです」
「あーあ。こんなに汗かいて。熱中症になったらどうするの？」

花壇の隅にしゃがみこんでいたアカリは僕を見上げる。
こんなに暑い日に、こんなところでしゃがみこんでいる女の子は、きっとこの地球上でアカリくらいだと思うよ。
額にはりついた前髪にそっと触れるとアカリは小さく笑った。

「冷たい飲み物、買いに行こうか。立てる？」
「炭酸がいい！」
「スポーツドリンクにしようね」

アカリの手を掴んで引っ張り上げると、立ち上がったアカリは僕をぎゅっと抱きしめる。

「ねーシュンちゃん」
「ん？」
「どうしてひとりで出てきたの？」
「どうしてだろうね？」
「あと１０分遅かったら、きっとあたし、溶けちゃってた」

抱きついたまま僕を見上げたアカリはうれしそうに微笑む。
こうやって甘やかすから、アカリは僕に依存する、と。
満足げな彼女に笑みを落とし、そっと頭を撫でる。
今はまだいいんだ。
アカリが望むことをしてあげる。
いつか訪れる、兄離れの日がくるまで、僕はめいっぱいアカリを甘やかしてやろうじゃないか。
身体を離したアカリは、いつものように僕の手を握って歩き出した。
ご機嫌さが垣間見える横顔はまっすぐ前を向いていて、時折なにかを確認するかのように僕を見上げて微笑む。
居心地がいいのは、重ねてきた時間のせいなのか。それとも――。

「シュンちゃん、アイスはんぶんこしようね！」

無邪気に笑うアカリを見下ろして、いろんな想いにフタをする。
僕たちに必要なのは、考えることなんかじゃない。
わがままを言える相手がいることと、アイスを食べることだけ。
それと、半分どころか全部アカリに奪われないように死守することだけ。

Ｓｐｅｃｉａｌ　ｔｈａｎｋｓ！：お題サイトさま「確かに恋だった」

０４：雨宿り

「雨だ……」

委員会が終わってようやく下校というそのときに降りはじめた雨。
アカリは濡れなかっただろうか。
灰色の分厚い雲で覆われた空を見上げ、とっさに思ったのがアカリのことだと気づいた僕は心の中で苦笑する。
これはもう、兄というより、父親に近いのではないだろうか。
今日は、急に入った委員会のせいでアカリとは一緒に帰らなかった。
アカリは最後までごねていたけれど、何時までかかるかわからないのに待たせるわけにもいかない。何度も説得して、校門まで送ると約束するとようやく頷いてくれた。
アカリは学校になじめていないのだろうか。
学校帰りに寄り道をする友人はいないのだろうか。
そんなことばかり心配する僕は、まだ１７歳だというのにすっかり父親の心境だった。

「あれ？　シュン、今帰り？」
「大下は居残り？」
「失礼だね。部活ですー！」
「お疲れさま。雨、やみそうもないなー……」
「……なんの部活なのかも聞いてくれないんだね」

聞こえるか聞こえないかの声でぽつりと呟いて大下は俯いた。
大下には悪いけれど、僕は彼女のことに何ひとつ興味はない。
興味がないから聞かないんだってことにそろそろ気づいてほしいと思う僕は、冷たいのだろうか。

大下に笑みを向けて、僕は小走りで駅へと向かう。
走ろうが歩こうが、どっちにしても濡れることはわかっているのに走ってしまうのは人間の性？
駅に着いた僕は、ハンカチで雨粒を拭った。
すでにずぶ濡れだから、拭いても変わらない。
湿った空気に包まれた電車に揺られ、自宅に近いいつもの駅の改札をくぐる。
雨足は弱まることなく、まだどんよりと分厚い雲が空を覆っていた。
もう走るのも面倒になってのんびりと歩き出した僕の目が、灰色の世界の中にピンクの傘をさしてパシャパシャと走っているアカリを見つけた。

「アカリ、なにやってんの？」
「あ、シュンちゃん！　ずぶ濡れ！」

駆け寄ってきたアカリは背伸びをして僕にピンクの傘をかざした。
薄い黄色のTシャツが水玉もようを作っていくのが見えて、慌てて傘を押し戻す。

「シュンちゃん、まだ帰ってきてなかったから迎えにきたの」
「どうせなら傘、持ってきてくれたらよかったのに……」
「あ……ホントだね」

アカリは小さく笑って、また僕に傘をかたむけた。
アカリが濡れたほうが困るのにな、と思ったけれど、精いっぱい背伸びをして傘をかざしてくれる気持ちはちゃんと受け取る。
お礼を言って、アカリからピンクの傘を受け取って歩き出した。
傘から落ちてくる水滴がアカリを濡らさないようにかたむけると、怒った顔で真ん中へと戻される。
何度さりげなくそうしても、アカリはすぐに察知して元の位置に戻

してくる。

「アカリ、風邪ひくよ？」

「馬鹿は風邪ひかないってママが言ってた。シュンちゃんは風邪ひいちゃうもん」

「あのね。馬鹿だから風邪をひかないんじゃなくて、風邪をひいたことにも気づかないって意味……」

「うんちくはいいの！　どうして電話くれないの？　あたし、駅まで迎えに行くのに！」

バシンと腕を叩かれて思わずさする。

濡れたシャツの上から叩かれると痛いんだってば……。

ピタリと立ち止まって俯いたアカリを雨粒が濡らしていく。

「大丈夫。僕はあんまり風邪ひかないしね。ほら、濡れるから帰ろう？」

「シュンちゃんはやさしいけど意地悪だ」

「どういう意味？」

「シュンちゃん、あたしの携帯の番号は知ってますか」

「知ってます」

「アドレスは知ってますか」

「知ってます」

「傘、持ってきてって、連絡して。一生のお願いだよ！」

もう何度目になるかわからない、アカリの“一生のお願い”。

わかったよ、とアカリの濡れた髪を撫でる。

ほんの少しだけ安心した顔で僕を見上げたアカリは、傘を持つ僕の腕に手をかけた。

ドキリとした。

普段、手を繋いで歩くこの道で、腕を組むのはなんだか緊張する。

けれどアカリはドキドキした僕とは違って、ご機嫌で歩き出した。
そうだよね。アカリ相手に緊張するのもなんだか変だよ。
そして気を取り直した僕は、また何度もアカリに傘を真ん中に戻されながら家路についた。
　不思議だね。
あんなにユウウツだった雨が、ほんの少しだけ楽しくなる。
ふたりで入るには少し狭すぎるピンク色の雨宿り。
見下ろすとそこにいるのは、満面の笑みのアカリ。

「だから言ったのに……」
「うーん……シュンちゃーん、頭痛いよぅ……」

　翌日、アカリは発熱して学校を休んだ。
アカリのクラスメートだという女の子が数人で僕の教室にやってきて、今日の分のノートを届けてほしいと手渡された。それを届けに、ずいぶんと久しぶりにアカリの部屋に入った僕は、高熱でうんうん唸っているアカリの頬にそっと触れる。赤い頬は熱を持っていて苦しそうだ。
おばさんが用意してくれた洗面器にタオルを浸してぎゅっと絞り、額にのせると、目を瞑っていたアカリは弱々しく目を開けた。

「シュンちゃ……もう帰って」
「なんで？　今来たばっかりなのに」
「シュンちゃんにうつっちゃう……」
「大丈夫だよ。アカリはもう少し寝てなさい」

　よしよしと頭を撫でると、アカリはおとなしく目を閉じた。
息苦しそうな呼吸と、赤い頬が、当たり前だけどいつもの元気すぎる彼女とは違ってなんだか胸が痛む。

アカリにノートをとってくれる友人がいたことがうれしかったのもあるけど、毎日一緒にいる存在が急になくなって不安になったのかもしれない。
咳込んだアカリの背中を撫でて、枕元に置いてあった水を飲ませる。

「うー……シュンちゃ……寒いよぅ……」
「毛布、もう1枚もらってこようか？」
「シュンちゃ、もう帰ってよぅ」
「毛布もらってくるね」
「うー……行かないでぇ……」

どっちだよ、と心の中でツッコミを入れながら、僕は少し迷って“おまじない”をした。
大きな瞳を丸くして僕を見上げるアカリを撫でて何もなかった顔で部屋を出る。
子どものころから変わらない、熱が出たときのおまじない。
僕らはあれから少しだけ大きくなって。でも、大人たちから見るとまだまだ子どもで。
だけど、おまじないをしていい年齢はすぎていたみたいだ。

「失敗した……」

思わずそう呟いたのは、熱のあるアカリみたいに顔が赤い自信があるから。
そっと指先で唇に触れて、一気に体温が上がった。
今のは、おまじない。
特別な意味はないってわかっているのに鼓動がうるさい。
何度か深呼吸して、ようやく少し落ち着いたころ、毛布を取りに動こうとした僕の耳に、ドサリと何かが落ちる音が届いた。
2階には今、僕とアカリしかいなくて、この家には下におばさんが

いるだけ。
慌ててアカリの部屋のドアを開けると、アカリがベッドから落ちていた。

「アカリ！？」
「シュンちゃ……なに、いまの……」
「え……いや、おまじない……」
「そか……そうだよね……」

さっきよりも赤い顔をしたアカリが、えへへ、と照れた顔で笑う。
どこか痛む場所はないか確認して、アカリを抱き上げてベッドに寝かせる。
ちょっと頭がアレなアカリでさえ、ベッドから落ちるほど動揺したんだ。もう、おまじないは封印しよう……。
おまじないが効いたのか、熱が上がりきったのか、翌日からアカリはまた僕の部屋にいる。
いつもと変わらずぴたりと僕にくっついているアカリだけど、自分の中に違和感が生まれたことに気づいた。
僕が望むのは、アカリの望むことをしてあげること。
それ以上も、それ以下も、ない。
ないはずなのに生まれてしまった違和感は、アカリに悟られないうちに消化しなければいけない。

僕とアカリは幼なじみでありながら、兄妹みたいなものだから――。

Ｓｐｅｃｉａｌ　ｔｈａｎｋｓ！：お題サイトさま「確かに恋だった」

０５：お昼寝

図書館に本を返しに行って、家に帰ってくると、リビングから楽しそうな笑い声が聞こえた。
まっすぐ部屋に戻ろうと思っていた僕は、そのままリビングへと向かう。
母さんと何かしているのだろうとばかり思ったけれど、どうやら今日は父さんと遊んでいたらしい。

「ただいま」
「おーシュン、おかえり。アカリちゃん、オセロ強いぞー」
「あのね、シュンちゃん！　おじさん、すっごい弱いのー！」

リビングに足を踏み入れた僕に、アカリが抱きついてくる。
アカリを抱きとめながらテーブルの上に視線を向けると、たしかにまっ白。
父さんは、アカリのことをまだ幼稚園児くらいに思っているのだろうか。
相当手加減してもらったであろうことに気づいていないのか、アカリはご機嫌だ。
ごろごろ甘えモードに入ったアカリの頭を撫でてキッチンに目を向けると、素麺を盛りつけている母さんと視線が合う。

「アカリ、昼ごはんだって。オセロ、片づけておいで？」
「はーい！　おばさん、お手伝いするー！」

話を聞いていなかったのか、アカリは僕から離れるとキッチンへ駆けていく。
アカリの背中を笑顔で見送った父さんが、オセロを片づけながらち

らりと僕を見た。
何か言いたげなその視線をかわして、僕も片づけを手伝う。
言いたいことはわかっているんだ。
父さんがこういう顔をしているときは、だいたいがアカリの心配。
そんな心配をされるようなことは何ひとつない。
どうせするなら、僕のヘタレっぷりを心配したほうがいいよ……。

「……アカリのことなら心配しなくても大丈夫だけど」
「その歳で嫁をもらうのはまだ少し早いよな」
「何言ってんの。早く片づけないと母さんに怒られるよ？」

アカリと結婚なんて、ない。
恋愛も、ない。
何度言ってもわかってもらえないのに、僕は何度も否定する。
まるで自分に言い訳しているみたいだ。
まだ何か言おうとした父さんを遮り、盛りつけの終わった素麺を運んできたアカリから濡れたふきんを受け取ってテーブルを拭く。
アカリにはこんな話を聞かれて意識されたくない。
僕はアカリの兄で十分。
それ以上は、何も望まない。

食事が終わって部屋に戻ると、リビングからオセロを持ってきたアカリがベッドの上にそれをのせ、手招きする。
これでも一応受験生だから、勉強したいんだけどなぁ……。

「シュンちゃん、勝負です」
「あのね、アカリ……」
「現実から逃げちゃダメだよ！」

アカリは真剣なまなざしで僕を見上げた。

だけど間違っていると思うんだ。現実と向き合うのなら、勉強が大事な時期じゃないだろうか。
しばらくにらみ合いが続いて、僕は小さくため息をついてベッドに腰を下ろした。
途端に満面の笑みを浮かべるアカリに苦笑いを返す。

「1回だけね？」
「うんっ！　シュンちゃん、黒ー。あたし、白ー！」

ほくほくと喜んだ顔でオセロを始めるアカリ。
どんなに約束をしても、1回で終わるわけがないことを知っていて、それに付き合う僕。
だけど、2時間ほど経過したあたりから急に眠くなってきた。
パタパタと石をひっくり返す音を聞いているとなんだか心地よい。

「シュンちゃん、寝るの？」
「んー……眠い。次は父さんとやっておいで」
「おじさん、打ちっぱなし行くって言ってたもんー」
「じゃあ母さんと……」
「おばさん、陶芸教室行ったも……」
「んー……」
「シュンちゃーん」

ダメだ。限界。
昨日、遅くまで勉強していたのが原因だろうか。
ここで眠ってしまったらアカリが寂しい思いをするってわかっているのに、閉じかけた瞼は鉛のように重い。
ぱたりとベッドに転がった僕は、どんどん遠くなっていくアカリの声を聞きながら、眠りに落ちていった。

アカリが泣いている。
僕は変わらないのに、目の前にいるアカリは小学生くらいだろうか。
夢か、と思いながらも、僕は小さなアカリに声をかける。
とてもキレイだとは言えない泣き顔のまま顔を上げた彼女は、なんの違和感もなく僕に駆け寄り、ぎゅっと抱きしめる。
夢の中でも僕は服で鼻水を拭かれる運命らしい。

『シュンちゃん、みんながアカリにいじわるするの』
「そっか。じゃあ、意地悪されないように強くなろうか」
『しかえし、するの？』
「違うよ。一緒に遊ぼうって言えるように、強くなるんだよ」

わかった、とコクンと頷く小さなアカリ。
過去にこんな出来事があった。あのときの僕はまだ幼くて、アカリをいじめるなって大暴れしたんだっけ。
今ならちゃんと守ってあげられるのにな……。

『シュンちゃん、だいすき！　ずぅっとアカリといっしょにいてね！』

心配しなくても、これからきみが大きくなって、高校2年生になるまで、毎日一緒にいるよ。
だからアカリは、安心していていいんだよ。

遠くから聞こえる子どもの声に意識が戻る。
窓から見える空は茜色に染まっていて、昼寝どころかずいぶんぐっすり眠ってしまったようだった。
そして、腕の中にはアカリがいる。
今度は夢じゃない。
……おまじないはダメなのに、これは許容範囲なのか。

脳みそが幼いのか、単にちょっとアレなのか判断ができない。
アカリを起こさないようにそっと抱え直してもう一度目を閉じる。
　おまじないから数か月。僕はずっと考えていた。
とても大事な存在で、毎日そばにいるのが当たり前の僕とアカリ。
血のつながりがなくて、でも兄妹みたいで。
兄離れする時期がきたら、アカリとこうして一緒に眠ることもなくなる。
アカリが毎日この部屋にくるから塾には行けない僕。
成績が下がって希望大学の合格圏内から外れたら、さすがにそんな言い訳もできなくなるから勉強も欠かさない。
　本当は、ずいぶん前から知っていたんだ。
アカリのせいにして、本当は自分がアカリのそばにいたかったこと。
“妹”だなんて思っていない自分に。
“兄”でいることを望んでいるアカリに悟られなくて、必死で兄を演じる自分に。
だから鍵をかけて隠したのに……。
腕の中で寝息をたてる小さくてあたたかい存在をぎゅっと抱きしめる。
僕は、いずれやってくる“兄離れ”のとき、この手を放してやれるのだろうか。
そう考えて乾いた笑いが唇からこぼれた。
放してやれるのだろうか、じゃない。
放してやらなきゃいけないんだ。

「きっつー……」

　アカリが目覚めたら、またちゃんと演じるから……。
それまで抱きしめていてもいいかな。
ずっと眠っていたふりをすれば平気かな。
　臆病な僕は、いつまでこんなことを続けられるのだろうか。

男嫌いのアカリにいつか好きな人ができて、僕とじゃない男と過ごす時間が増えて。
それを平気な顔で見送らなきゃいけない。
どうか最後まで演じきれますように……。

「シュンちゃん、ごはんできたー！　起きてー」
「ん……」
「今日はアカリさん特製の焼き魚です！」

目をあけると、エヘンと得意顔のアカリがいた。
焼き魚……焼くだけで特製になるのか……。
ぼんやりした頭でそんなことを思いながら身体を起こす。
部屋の時計を見上げると、もう１９時になろうとしていた。

「あれ……アカリ、帰らなくて平気？　起こしてくれたらよかったのに。急いで送るね」
「今日はパパもママも遅いから、お夕飯はシュンちゃんちなの。今日はいっぱい一緒にいられるね！」

ぴょんと飛んできたアカリを抱きとめて、うれしそうに笑うその頬をそっと撫でた。

「シュンちゃん？」
「うん……なんでもない。行こうか」

ぽんぽん、とアカリの頭を撫でてスイッチを切り替える。
大丈夫。ちゃんと“兄”の顔ができているよ。
だから、そんな不安そうな顔はしないで。
僕を見上げて、つないでいた手のひらがきゅっと握られる。

ちくんと胸が痛むのに気づかないふりをして、僕はアカリの手を握り返した。
安心していいんだよ。
アカリが僕を必要だと思っている間は、絶対にこの手を放さないから、さ。

Ｓｐｅｃｉａｌ　ｔｈａｎｋｓ！：お題サイトさま「確かに恋だった」

06：弱点

「シュンちゃーん」
「……気持ち悪い。なんの真似？」
「冷たいシュンちゃんなんて、シュンちゃんじゃないっ！！」
「……それ、全然、似てないから」

ちらりと目の前にいる整った顔を見やって、すぐに視線を落とした僕に、樫田は笑う。
最近、いったいなんの嫌がらせなのか、樫田が妙に絡んでくる。
気持ちの悪い声色で。

「いやー最近俺、アカリのマネ、うまくなったと思わね？」
「全然。まったく進歩なし。ものまねの才能ないみたいだからやめたほうがいいんじゃない？」
「シュンが反応するのって、アカリにだけだから、俺、寂しくって」
「ふーん」
「あら、怒った？」

怒ってないよ。僕にこれ以上構わないでくれさえすれば。
樫田はアカリのことを気に入ったのか、アカリを見かけるたびに声をかけているらしい。
それがとても嫌だと、いつもの一生のお願いをされた。
樫田の抹消を。
もちろん、叶えてやれないことだからなんとか宥めたけれど、少し考えなきゃいけないかもしれない。
たしかにれはウザイ。

「アカリ、俺がもらってあげようか」

「アカリは嫌だって、樫田のこと」
「あら、ざんねーん。って、噂をすれば」

アカリー、と笑顔で手を振る樫田に、教室のドアから顔をのぞかせたアカリは心底嫌な顔をして視界から消えた。
僕はシャープペンシルを机に置いて立ち上がる。
ちらりと見下ろすと、樫田は笑顔のまま首を傾げた。

「樫田はいいヤツだと思ってるよ」
「んじゃ、アカリ、ちょーだい」
「アカリがおまえのことを好きになったらね」

そう。樫田はいいヤツなんだ。
見た目はチャラいけど、本当はいつも周りのことを考えている。
アカリが好きになった男なら、僕だって邪魔なんかしない。
いってらっしゃーい、と手を振る樫田に笑みを返して廊下に出ると、階段の隅に身をひそめていたアカリが飛んできた。

「シュンちゃんー！　樫田、ウザイ！」
「そうだね。ちょっとウザイね」
「え……怒らないの？　いつもならそんなこと言っちゃいけませんって言うのに」
「うん。今はね。ちょうど僕もウザイって思っていたから」
「よしわかった！　じゃあ抹消しよう！」
「それは無理だね」
「うぅー。樫田、いなくなれ。どっか行け。あたしの前に現れるな」

祈っているのか呪っているのかわからない口調のアカリに思わず笑う。
僕の友人と呼べる人のことは、たいてい男女関係なく嫌うことが多

いけれど、ここまで拒絶するのは本当に珍しい。
たぶん、嫌がっているのをわかっていて絡んでくるから余計にウザイのだろう。
今日も特別用事はなかったらしいアカリは、予鈴が鳴るとすぐに自分の教室に戻っていった。
自分の席に戻った僕に、樫田はにこりと意味深な笑みを浮かべる。

「何？」
「シュン、本当にアカリのこと、妹以上に思ってない？」
「思ってないよ」
「じゃあさ、ちょっと俺にアカリのこと、預けてみない？」

またその話かとうんざりしながら樫田を見る。
てっきりふざけているのだろうと思っていたのに、樫田は笑っていなかった。
心臓が嫌な音をたてる。
まっすぐ僕を見ていた樫田は、ふっと表情を緩めた。

「ま、考えておいてよ。今日の数学、小テストからスタートだってさー。健闘を祈る！」

ぽんっと僕の肩を叩いて自席に戻っていく樫田の背を呆然と見送る。
本気、なのだろうか。樫田はアカリのことが好きなのだろうか。
席に戻った樫田は、いつものように周りのやつらとふざけている。
ひとり、もやもやした気持ちを抱えた僕は、小テストどころじゃなかった。
もし本気だったら？
アカリは？

「うっわー。珍しい点数ですね、シュンちゃん」

翌日、数学の小テストの答案が返ってくると、樫田は机の上に出しっぱなしのプリントを見て楽しそうに笑う。
僕もこんなにたくさんバツ印のついた答案は、アカリのそれしか見たことがない。

「シュンってさ、わかりやすいのな」
「何が？」
「おまえ、俺とつるんでたら大学落ちるよ」

それはそれは楽しそうに笑った樫田は、すとんと机に腰を下ろして答案用紙を手に取る。

「おまえの受験前日に、俺、アカリに告ろうかなー」
「は？」
「そしたらおまえ、試験どころじゃないだろ」

あぁ、はめられたわけだ。
小さくため息をついて樫田から答案用紙を受け取って眺めていると、なんだかおかしくなってきた。
誰にもばれたくなかったし、自分でさえも認めたくないことだったけれど、樫田には見破られていたわけだ。
なんて性格の悪い男なんだ。

「まぁ、ちょっと試してみただけだったんだけどねー。たまたまビンゴだった、ってだけで。悪気はないから許してちょ」
「最悪。おまえ、性格悪すぎ」
「褒めてくれてありがとう。でも困ったねー」

「何が」
「ただのシスコンならまだしも、ライバルかー」
「……どういう意味」
「そのまんまー。おまえの受験日は冗談だけど、俺、そのうちアカリをもらうよ」

にこりと、整った顔が笑う。
わざわざ嫌われているとわかっている相手を好きにならなくたって、樫田はもてる。
アカリは頭がちょっとアレだし、特別かわいい顔をしているわけでもない。
性格も……いいとは言えない。
なんで樫田は急に……。
言いようのない不安がじわじわと僕を侵食していく。

「邪魔しないでね、オニイサン」
「……」
「俺も邪魔しないから。正々堂々といこうじゃないか！　ライバルよ！」

ばしばしと肩を叩いて樫田は笑う。
樫田はいいヤツなんだ……。本当に。
そして気づいた。
本当はアカリが誰かを好きになるかもなんて、全然リアルに考えていなかったこと。
アカリと付き合ってみたいと言うクラスメートが、いつだって本気じゃなかったから余裕でいられただけだってこと。

「そんな顔しなくても無理やり奪ったりしないって。ほら、アカリ、迎えにきたよ？　行かなくていいの？」

「……おまえ、本気？」
「超ほんきー。シュンが行かないなら俺、一緒に帰ろうって声かけてくるけど？」
「……じゃあまた明日」

慌てて立ち上がった僕に樫田の笑い声が聞こえる。

「アカリー。今度は俺とも一緒に帰ろうね」
「……シュンちゃん、樫田、ウザイ」

一瞬も樫田に視線を送らないアカリは、不快さをまったく隠さずに僕をまっすぐ見上げる。
アカリがここまで嫌う男も珍しい。
言い換えれば、樫田はもう、アカリの中に入ってきているということ。
アカリは、どうしたい？
じっと彼女を見下ろすと、きょとんと首を傾げる。

「シュンちゃん、帰らないの？」
「……帰ろうか」

いつものようにアカリの頭を撫でて、スイッチを切り替える。
どこか不満そうな顔をしていたことにも気づかずに。
僕の全部は、アカリを中心にまわり続ける。

Ｓｐｅｃｉａｌ　ｔｈａｎｋｓ！：お題サイトさま「確かに恋だった」

07：癖

「シュンちゃん、考えごと？」
「ん？　違うよ？」

テスト勉強をアカリとふたりでしていた僕は、持っていた赤ペンをテーブルの上に置いて両腕を上に伸ばす。
いつも底辺ギリギリのアカリもさすがに危機を感じたのか、勉強道具一式を持って部屋にやってきたのは数時間前。
かけ算あたりからやり直したほうがいいのではと思うほど、ひどい。
いや、むしろ、国語からだ。文章を読むというところからやり直そうか。
1問ごとに手を止め、泣きそうな顔で僕を見上げるから、自分のテスト勉強なんてひとつもできない。
アカリが帰ってからやろうと諦め、シャープペンシルを赤ペンに持ち替えたのが1時間ほど前だっただろうか。
それからまだ、1問しか進んでいないことに、本当に疑問を感じる。
だけどこれはふざけているわけではない。
アカリなりに、必死なんだ。

「シュンちゃ……怒ってる？」
「怒ってないよ。大丈夫」

よしよしと頭を撫でて立ち上がった僕を、不安そうなアカリの瞳が追いかけてくる。
もう、数学だろうとなんだろうと、丸暗記してもらうしかない。
机の引き出しにしまってあった去年のノートを探しだして、アカリに手渡す。
頭はちょっとアレだけど、運だけはいいアカリには、もしかすると

最初から丸暗記してもらったほうがよかったのかもしれない。
うまくいけば赤点は免れる。
ノートをめくっていたアカリは、ちらっと中身を見ただけで押し返してきた。
これは許容範囲。
一瞬でも見ただけえらいと思ってやらなければ、アカリとは付き合えない。
　アカリのノートが黒板を丸写ししただけだったおかげで、ヤマは張れそうだ。
過去の自分のノートからテスト範囲のページを探して、僕は数式を全部イラストに描き替える。
美術の成績はさほど良くなかったけれど、トランプのマークくらいは描けるさ。
ちらりとアカリを見ると、遊び心を刺激されたらしく彼女の目が輝いている。
よしよし。
ウサギなのかクマなのか、あるいはイヌなのか微妙な絵を描きいれた僕は、そのままアカリにバトンタッチ。
ぱぁぁぁぁっとうれしそうな顔を見せたアカリが、ちらりと僕を見上げる。
どうぞ、と頷いてやると、アカリはペンケースからいろいろな色のペンを取り出して色を塗りはじめた。
楽しそうに色を塗っている様子に安堵して、飲み物を取りにいって戻ってきた僕は、満面の笑みに出迎えられる。
アカリは子どものような笑顔で自慢げにノートを掲げた。
想定内とはいいつつも、思わずひくりと頬が引きつる。

「アカリさん……誰が遊んでいいと言いましたか」
「ハートマークを見たらつい」

せっかくアカリ仕様にしてあげた数式のハートマーク前後の文字がキレイに消され、“シュンちゃん”と“アカリ”が加筆された数式にため息が零れる。

「わかった。じゃあこの数式は、“シュンちゃん式”と名づけます。忘れたら、思い出すまで口をきいてあげません」

「やだっ！」

「じゃあ覚えてね？」

むぅっと頬を膨らませたアカリを無視して、テスト範囲で使いそうなものにどんどん名前をつけていく。

アカリママ、アカリパパ、シュンママ、シュンパパ。アカリの好きな人の名前。

アカリが名づけ親となったお隣の犬のにゃんごろー、小学校で飼っていたうさうさ、よく奪われるいちごタルト、アカリの好きなソーダアイス。

英語の仮定法あたりを線で括り、もう出尽くしてしまった名づけにペンを持つ手が止まる。

さんざん迷って、僕は試すようにそこへ樫田の文字を入れ、ちらりとアカリを見た。

期待を裏切らず、心底嫌な顔をしたアカリは、持っていたペンでぐちゃぐちゃと塗りつぶし、こんにゃくゼリーと書き加えた。

「こんなところに変な名前、書かないで！　ただでさえ英語、キライなのに！」

「アカリが知っている名前だったらいいかなと思ったんだけど……」

「そんな名前、知らないもん」

機嫌を損ねたらしいアカリはぷいっとそっぽをむく。

だけど僕は、樫田に申し訳ないと思いつつ、本当にホッとしていた。

我ながらヘタレだとわかっているけれど。

「アカリに好きな人ができるのは、きっとまだまだ先だよね」

安心して口が滑った。

思いっきり不満顔を見せたアカリは、またぷいっと顔をそむけてぽつりと呟く。

「いるもん、好きな人。シュンちゃんには一生教えてあげないけどねっ！」

「え？」

「もう勉強、飽きた。帰る」

テーブルの上の勉強道具をバッグに押し込んだアカリは、どすどすとものすごい足音をたてて部屋から出ていった。

そこに取り残された僕は、呆然とドアを見つめていた。

アカリに好きな人？

初耳なんですけど……。

その後、一緒に夕食をとる予定だったアカリは家に戻ってこなかった。

アカリの家まで届けてこいと言われて向かいの家まで届けに行っても、玄関のドアが開くことはなかった。

こんなこと、生まれて初めてでどうしたらいいのかわからない。

すごすごと家に戻ると、待ち構えていた母さんに笑われた。

「アカリちゃんとケンカ？　珍しいわね」

「ケンカじゃない、と思う……」

「あんたはお父さんに似て無神経だからねー」

僕の手から夕食のおかずが入った袋を抜き取ると、母さんはさり

げなく嫌味を残して玄関から出ていった。
無神経だなんて、アカリ以外に言われたのははじめてだ。
けっこう気を遣って生きていると思っていたのだけれど、勘違い？
すぐに戻ってきた母さんの手には、中身がなくなった袋だけ。ということは、アカリはちゃんと玄関を開けたということだ。
そこまで拒絶されるほど怒らせるようなことを言っただろうか……。
当然、勉強なんてできる気分ではなく、ざわざわする嫌な気持ちのまま眠れない夜を過ごした。

翌朝、なにもなかった顔でタッパーを返しにきたアカリは、なにかあった顔で僕を置いて先に歩き出す。
慌てて追いかけても、アカリは振り向かない。
なにをしたのかもわからないのに謝ることはできないし、僕を拒絶したままの背中を見て、どうしたもんかとため息が零れた。
ついに学校に着くまで無言を貫き通したアカリは、一度も僕に視線を向けることなく自分の教室に入っていく。

「あれー？　ケンカですか、オニイサン」

いつから背後にいたのか気づかなかったけれど、このふざけた口調は振り返らなくても察しがつく。

「……樫田のせいでね」
「え、まじで？　チャーンス！」

八つ当たりだってことくらい、僕にもわかっていたけれど、能天気な様子の樫田が無性にむかつく。
アカリに無視されることがこんなに自分を乱すなんて知らなかった。
信じられないほど動揺していた僕は、アカリの教室に入っていく樫田を黙って見送ることしかできなかった。

テスト初日は散々だった。
いつもなら中休みのたびに教室にやってくるアカリが一度も顔を見せなかったし、いつもならとりあえずノートを開いてみる樫田は中休みのたびにうきうきと教室を出ていく。
なにもかもおもしろくなくて、イライラして、心がざわつく。
結局、ホームルームが終わってもアカリは顔を見せなかった。
日誌を書き終えた僕の目の前に、突然樫田の顔が現れて、思わず身体を引く。

「考えごとですか、シュンちゃん」
「なんで？」
「ペンで頬をトントン」
「は？　なにそれ」
「アカリが言ってた。おまえの癖なんだってさー」

知らなかった。
そんな癖があったんだ……。
まじまじとペンを見つめると、今日何度目かわからないアカリの笑顔が頭に浮かぶ。

「早く迎えに行ってあげないとますます拗ねると思うんだよね、俺」
「うん……」
「俺、全然悪くないはずなのに、アカリに怒られちゃった。樫田のせいだ！　って」
「うん……ごめん。本当におまえのせい」
「シュンちゃん、ひどいっ！」

まったく似ていないアカリのマネをした樫田は、僕の肩をぽんと叩くとクラスメートとじゃれながら帰っていった。

樫田は本当にいいヤツだ。
今日ならアカリだって樫田と一緒に帰ったかもしれないのに。
チャンスだって言っていたように、利用すればいいのに。
八つ当たりされていることくらい気づいていたはずなのに。
小さくため息をついて日誌を片手にバッグを肩に担ぐと、教室の入り口にアカリの姿が見えた。
急いで駆け寄るとアカリは怒った顔のまま僕を見上げる。

「あたし、早く帰ってお勉強しなきゃいけないの！」
「うん……玄関で待ってて」

僕の制服の裾をぎゅっとつまんだアカリの瞳が揺れる。
怒らせた理由はさっぱりわからないけれど、寂しい思いをさせてごめんね、の代わりに、そっと頭を撫でた。
１日ぶりの、アカリとの会話。
どんなに僕が安心したかなんて、きみは知らない。

Ｓｐｅｃｉａｌ　ｔｈａｎｋｓ！：お題サイトさま「確かに恋だった」

０８：補習

担任に呼ばれて職員室に行った帰り。
教室に戻ろうとしていた僕は、廊下でアカリの姿を見かけた。
当然のようにアカリの元へ向かいかけ、足が止まる。
視線の先には珍しくまじめな顔のアカリ。
そして、樫田がいた。
教科書を片手に真剣な表情で頷いていたアカリは、最後に大きく頷いたあと、樫田を見上げて微笑んだ。
樫田は、いつも僕がアカリにするのと同じように、アカリの頭を撫でる。
きっと嫌な顔をして振り払ってくれるだろうと咄嗟に思った僕の期待は裏切られ、アカリは照れたように笑った。
心に芽生えた感情がやきもちであることは、いくら無神経だと言われる僕でも知っている。
今までなんとなく付き合ってきた“彼女”と呼ばれる女の子たちのそれは面倒な感情でしかなかったのに。
今からこんなので、耐えられるのか？
そこに立ち尽くしたままの僕に気づいたアカリが満面の笑みで駆けてきた。
抱きとめながらも、僕は動揺していることを彼女にバレないように必死で笑みを浮かべる。

「シュンちゃん！　英語、赤点免れた！」
「そっか。がんばったね」
「うん！　見てみてー！　４８点！」

うれしそうに見せてくれた答案は、アカリにしてはずいぶんがんばった。

「どうしてもわからなくて、ここ、樫田におしえてもらったの！」
僕は、しばらく現実なのか幻聴なのか判断できずにいた。
だって、今までにアカリが自発的にミス回答の箇所を学ぼうとしたことがあっただろうか。
誇らしげに答案を見せるアカリの顔を見ると、これは現実なのだろう。
もう一度アカリの答案用紙に視線を落とし、合っていた箇所で止まった。
そこは、僕が“樫田”と書いた場所で、アカリが“こんにゃくゼリー”と書き直したところ。
ミスリードしやすいところだったのに全問正解している。
仲直りはしたけれど、好きな人の存在が誰を指しているのか、アカリに聞けずにいた。
――樫田のことが好きなの？
嫌な感情が僕の中を塗りつぶそうとしたとき、アカリが僕の手をぎゅっと握った。
ハッとして見下ろすと、不安そうな瞳が僕を見上げている。
曖昧に笑って見せて答案をアカリに返したところで、意味深な笑みを浮かべた樫田がポンッとアカリの肩を叩いた。
「アカリ、案外物覚えいいじゃん。俺、もっと馬鹿なのかと思ってた」
「樫田、うるさい。もうあっち行って！　邪魔しないで！」
「はいはいー。じゃあ、補習、がんばってねー」
ひらひらと手を振って教室に入っていった樫田を睨むように見送り、アカリはまた僕を見上げる。

そんな変化でさえ、心が、痛い。

「数学がね、全然だめだったの。シュンちゃん式、難しいんだもん……」

「そっか……」

「でもね、いっこ、できた！　だからあたしを捨てないで？」

1問しかできなくたって、僕がアカリを捨てるわけなんてないのに、不安そうな顔で僕を見上げている。

大丈夫だよ、と頭を撫で、アカリの手からペンを抜き取って数学の答案に要点を書き出した。

意識しなくても視界に入ってくる『本日補習！』の赤い文字。

僕が書いたところを何度も質問して確認したアカリは、予鈴と共にトボトボと教室へ戻っていった。

幼いころからずっと一緒にいたアカリ。

アカリのことならなんでも知っていると思っていたのに、本当は何も知らないのかもしれない。

こんなにそばにいるのに……。

こんなに……。

失くしたくないと思っていたのは、なんの心配もいらない緩やかな幼なじみという関係だったのだろうか。

守りたいと思っていたのは、屈託ない笑顔だったのだろうか。

隠したかったのは自分の気持ち？　それとも。

結局僕は、アカリの存在を利用して自分を守りたかっただけなのではないだろうか。

授業が始まってすぐに、少し離れた席にいる樫田と目が合った。

樫田は小さく笑って、シャープペンシルで自分の頬をトントンと叩く。

慌てて僕は頬からそれを離した。

考えごとをしているときの、僕の癖。

アカリが気づいた、僕の癖。
にこりと笑みを浮かべた樫田はゆっくりと僕から視線を外した。
楽しそうに上げられた口角が、今の僕と樫田の違いなのだと思う。
僕はどうしたい？
どうなりたい？
何を、望む？
灰色に塗りつぶされた僕の心は、黒くもなれず、白くもなれない。

放課後、アカリの補習が終わるのを待っていた僕は、足を引きずりながら教室に入ってきた大下に思わず声をかけた。

「どうしたの？」
「久しぶりの部活で張り切りすぎちゃったの。シュンは……アカリちゃん待ち？」
「うん。大丈夫？」
「せっかくのテスト明けなのにねぇ。一応病院に寄ってから帰るよ」

ぴょこぴょこと歩きにくそうに自分の机に向かった大下は、バッグを抱えた瞬間、バランスを崩して倒れ込んだ。
あまり大下とふたりきりにはなりたくないけれど、痛みで顔をしかめたクラスメートを放置できるほど嫌いなわけではない。

「……病院まで送ろうか？」
「ホント！？　アカリちゃん、いいの？」
「よくないけどメールしておけば平気。バッグちょうだい」

苦笑いした大下の腕からバッグを引き抜いて、すぐにアカリへメールした。
駅で待っていれば、大下を病院まで送り届けても補習が終わるころには間に合うはずだ。

大下のペースに合わせてゆっくり歩いているのに、彼女は何度も立ち止まって苦しそうにしていた。
どこの部だったか忘れたけれど、運動部に所属しているはずの大下が校門から数メートルで疲労するわけがない。
それだけ痛むのだろうとは察しがつくけれど、時間ばかりが気になる薄情な僕。

「大丈夫？」
「うーん……ごめん。掴まらせてもらってもいい？」

遠慮がちに伸びてきた大下の腕が僕の腕に触れる。
腕時計を見ると、補習が終わるまであと１０分もない。
ちらりと大下を見下ろすと、額に汗を浮かべている。
僕は大下の手を放してその場に屈んだ。

「何してるの……」
「乗って。恥ずかしいだろうけど」
「え……私、重たいよ？」
「アカリで慣れてる」

少しの沈黙のあと、大下の手が僕の肩に乗せられた。
鍛えているわけでもないし、がっちりした体型とは言えない僕でも、女の子を背負うことくらいはできる。
お世辞にも軽いだなんて言ってあげられないほどギリギリだけれど。

「ごめんね……ありがとう」
「どういたしまして」

それ以上の会話はなかった。
きっと高校生にもなっておんぶなんて恥ずかしかっただろうし、な

により僕は、背負っただけで精いっぱいだから。
学校近くの病院で大下を降ろして、駅まで全力で駆けた。
教室で待っているって約束をやぶってしまったことをちゃんと謝りたかったし、今アカリのそばをほんの少しでも離れることは嫌だった。
駅に駆け込んだ僕は、呼吸を整えながらアカリを探す。
僕の目はすぐに姿を見つけたけれど、アカリの隣には樫田がいて。
深刻そうな顔で話しているアカリは、僕の知っているアカリではなかった。
しばらくして樫田は腕時計を見てからアカリの頭を撫でた。
寂しそうな顔で樫田を見送る姿に、胸が締めつけられる。
ずいぶん長い時間、僕はそこから動けなかった。
頭をよぎるのはいつも同じこと。
アカリが僕の手を放して、僕じゃない誰かに笑みを向けるのを、ただぼんやりと眺めている未来。
どれくらい時間が経ったのか、「シュンちゃん！」と僕を呼ぶ声と同時にいろんな音が耳に入ってきた。

「大下さん、大丈夫だった？」
「え？」
「病院まで、送ってあげたんでしょう？」
「うん……なんで知ってるの？」
「樫田から聞いた。シュンちゃん遅いから心配だったの。怪我、大丈夫だった？」
「えっと……診察終わるまで待っていたわけじゃないから……」
「薄情だねぇ、シュンちゃん」

一瞬、安心した顔を見せたアカリはすぐに呆れたような表情で僕を見上げた。
本当に薄情だね、僕……。

たかがクラスメイトに、どうしてもっと親切にしてやれなかったのだろう。
たとえ迷惑な想いを持たれていたとしても、怪我をしているクラスメイトに、していい態度だったのか？
　早く帰ろうよ、とアカリが見せたいつもの笑顔にホッとして。
ぎゅっと繋がれた手のひらが心地よくて。
僕はいろんなことを諦めた。
アカリが笑っていてくれるなら、誰を好きになろうとしていても、それでいいよ。
小悪魔なきみが、幸せそうに笑っていれば、それでいい。
僕は、きみが生まれたときから、ずっときみの味方だからね。
今は僕に向けられているこの笑顔が、いつかほかの誰かに向けられていても。
それでよかったんだと思えるように、努力するだけ。
もうすぐ、この繋がれた手のひらが離れたとしても。
僕は笑顔でアカリを見送るんだ。
そう、するしか、ないんだ。

Ｓｐｅｃｉａｌ　ｔｈａｎｋｓ！：お題サイトさま「確かに恋だった」

09：バイト

アカリさんの様子がどうもおかしい。
最近、こそこそと樫田に会っているようなのだ。
それとなく聞いてみたけれど、言葉巧みにはぐらかされる。
またしても課題のノートに得体の知れない文字を書き込んでいた僕は、ため息をつきながらそれを消しゴムで消していった。
兄離れ……かな、そろそろ。
いや、妹離れかな。まあどっちでもいいや。
すべて消し終えた僕は、部屋のドアの向こうからトントンと階段を上ってくる音をキャッチして再びシャープペンシルをノートに走らせた。
ドアの前で足音が止まったかと思うと、いきなりそれが勢いよく開く。
一つひとつの行動が大ざっぱなアカリらしいドアの開け方だ。

「シュンちゃん！　あたし、バイトをすることになりました！」
「はぁ！？」
「あのね、樫田がね、ケーキ屋さんでバイトさせてくれるって！」

また樫田だ。
そういえばいつだったか、樫田には気をつけろってアカリから言われたような気がする。それってもしかすると、樫田は最初からアカリの意識に入っていたということなのかもしれない。
樫田もアカリの扱いに慣れているし、だったらもう……。

「そっか。よかったね。樫田に迷惑をかけないようにね？」
「わかってるってば！　もうシュンちゃんってば心配性なんだからー」

「バイトって、僕、迎えに行けないけど大丈夫？」
「だいじょぶ！　樫田が送ってくれるから」

ぴょんと僕の背中に飛び乗ってきたアカリの重さを感じながら、子ども時代のことを思い出していた。
ずっと僕の後ろにくっついていたアカリ。たびたび迷惑だと思いながらも、やっぱり、いざ離れるとなると寂しいものなんだなぁとしんみりする。
それなりに心の準備はできていたようで、思っていたより衝撃は少なくてホッとした。
妹の幸せは、見守ってあげなきゃいけない。
僕が悲しんだりしたら、きっとアカリは前に進めない。

１１月下旬から、アカリは樫田がバイトしているケーキ屋でクリスマスケーキの予約受注やら店頭での接客やらと毎日忙しそうだった。
何もすることがない僕は、ただひたすら家でぼんやりしているだけ。樫田は毎日アカリを家まで送り届けているらしく、僕の役目は完全に絶たれていた。

「シュンちゃん、考えごとですか」

にこりと笑みを浮かべた樫田が僕を覗き込んで、自分の頬をトントンと指先で叩く。

「おにーさんに相談があります」
「樫田の兄貴になった覚えはないけど、なに？」
「クリスマス、バイトが終わったらアカリをください」
「……僕の意見なんて聞かなくてもいいんじゃない？」
「だよなー。一応聞いておこうと思っただけ。んじゃ、今日も時間

どおり送り届けるからご心配なくー。でも明日はちょっとだけ見逃してね」

僕の手からペンを抜き取った樫田は、それを制服の胸ポケットに差し込んで、微笑んだ。
ほんの少しだけ首をかしげて、僕の返事を待っている。

「今年のクリスマスは、アカリはこないって母さんに言っておくよ」
「おっけー。んじゃねー」

樫田はバッグを肩にかけると、ひらひらと手を振って教室を出ていった。
取り残された僕は、もう何も考えられなかった。
きっと、もう何も考えたくなかったんだ。
帰る準備を整え、バッグを手に教室を出る。　校門を抜けようとしたところで大下に呼び止められ、振り返った。

「シュン……あのね？」

大下は泣きそうな顔で僕を見上げる。

「明日……予定、ある……よね？　アカリちゃんと一緒だよね？当たり前だよねー！」
「ないよ」
「え！？」
「欲しかった本の新刊が出たから買いに行くくらい」
「アカリちゃんは！？」
「バイト。そのあとはデートかもね」

からっぽなのに、案外笑えていてホッとした。

しょせん、幼なじみなんて疑似恋愛の対象でしかない。
毎日そばにいるから、それが当たり前になり、恋だと錯覚する。
大丈夫。僕は、大丈夫。

「一緒に行く？」
「ほんと！？」

とてもうれしそうな笑顔を見せた大下に、ほんの少しだけの罪悪感。
僕はまた、僕を好きだと言ってくれる女の子を利用しようとしている。
大下は友達だから……傷つけるのをわかっているのに気があるそぶりなんてしちゃいけないと思っていた。
だって、知っているから。
どんなにアカリへの気持ちが恋ではないと理論づけたところで、僕はわかっているんだ。
誰と付き合っても、アカリへの気持ちは変わらないことも、僕と付き合った子がどれほど悲しい思いをするのかも……。
それでも、アカリに好きだと告げられない僕の弱さも。

「シュンちゃん！？」
「バイト、がんばってる？」
「うん！　なんでこんなところに？」

クリスマス。
僕はアカリがバイトしているケーキ屋に来ていた。
今日まで僕は、アカリが樫田に向ける笑顔を見るのがきっと怖かったのだと思う。だから、母さんにどんなに頼まれても、この店のケーキだけは買いに来れなかった。

でも、やっぱり最後に兄として、妹ががんばっている姿は見ておきたい。
驚いた顔は一瞬だけで、アカリは照れたように笑った。
「ケーキ、買いに来たの？」
「ううん。これから大下と出かけるんだ。その前にアカリのがんばってる姿を見たくなって」
大下の名前にピクリと反応したけれど、アカリはなにもなかったかのように微笑む。
クリスマスプレゼントは悩みに悩んで、当日に大慌てで買うのが毎年のことだったけれど、今年は何を贈るか前日に決まったんだからすごいことだよね。
初めてのバイトでクタクタになりながらもがんばったアカリに、僕からの最後のプレゼントをあげようと思ってここにきた。
――なんて、それは言い訳。
こうでもしなきゃ、踏ん切りがつかなかっただけ。
「少し話せる？」
「うん、あと5分で終わる！　裏で待っててくれる？」
「いいよ。じゃああと5分、がんばっておいで」
そっと頭を撫でると、アカリは笑みを浮かべて僕を見上げ、頷いた。
僕たちは幼なじみだから、兄離れも妹離れもない。
だから本当に、こうして会うことが減れば、ただのお向かいさんになる。
前もって樫田からアカリのバイトが終わる時間を聞き出していたのだから、この待ち時間は想定内。
想定外だったのは、大下が約束の時間より早くここへ到着したこと

だけ。

「シュンちゃん、お待たせー！」
「アカリさん、大事な話があります」
「はい、なんですか」
「僕ね、今夜、遅くなるから」
「……どうして？」
「大下とデートだよ。わかるよね？」

僕が発した言葉に、アカリはものすごく不機嫌な顔になった。
まだ少し先の通りを歩いている大下が、僕に気づいて小さく手を振ってくる。
ここからじゃきっと見えやしないのに口の端を少しだけ上げてから、アカリに向き直った。

「アカリも今日、樫田と一緒なんだよね？」
「……」
「僕と一緒にいるわけじゃないんだから、時間だけはちゃんと守るんだよ？」
「あ。ありさんだー。こんにちはー」

アカリは突然しゃがみこみ、足元へむかってあいさつし始めた。

「アカリ、聞いてる？」
「ダンゴ虫さん、こんにちはー」
「アカリ！！」
「……大下さん、待ってるよ。早く行かなきゃ、またすぐに愛想尽かされちゃうんだから」
「ちゃんと僕の話、聞いて。僕の、一生のお願い。時間だけは……」
「わかってるってばー。はいはい、いってらっしゃーい」

しゃがみこんだままのアカリは、虫の観察で忙しいらしく、顔も上げずにひらひらと手を振った。
もう、すぐそこまで来ていた大下が僕の名前を呼ぶ。
どんなに促しても最後まで顔を上げなかったアカリを置いて、僕は大下の元へと向かった。
最後まで兄貴らしいことをさせてくれないフリーダムなアカリに背を向け、小雪がちらつくこの日、僕は“恋”を捨てた。

Ｓｐｅｃｉａｌ　ｔｈａｎｋｓ！：お題サイトさま「確かに恋だった」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5490w/

そんな恋のふいんきで(全)

2011年11月30日19時45分発行